

猿新聞

編集・発行者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
発行部数
錦生地区：100部
赤目地区：200部
ひなち・富貴ヶ丘
：200部
つつじが丘：400部
市民センター：120部
名張市議会：20部
名張市役所：20部

サル大量捕獲 森林の再生

地域住民は、「捕獲による個体数の削減」を訴えるが、反面「地域的に貴重な個体群」を維持する姿勢を崩さない人々もいます。住民の暮らしの安全か、群の安定維持か…。難しい選択です。

だが、サルも里山の生態系を担う一員であるということ忘れてはなりません。

名張B群の大量捕獲は3月末終了しました。今回（27年度）実施された大量捕獲の結果、推定個体数は僅か7頭（ハナレ3頭を含む）にまで減少しています。

現在の内訳は、
オトナメス 1頭
コドモ 1頭
アカンボ 5頭
（宇陀市・報告）

と、消滅状態です。

名張B群は、大きな増減なく50頭前後で推移していましたが、平成25年度に実施した個体調査の結果、頭数が38頭と大幅に減少していたことから、群れの分裂が懸念されたこととありますが、今回（27年度）の個体調査では、個体数の復元の兆しが見られました。捕獲により群れが極

ニホンザルの生息環境に、変化が見え始めたのが1960年～1970年代です。植林後10～20年経った1970年頃、針葉樹林が成熟して餌不足に陥ったサルたちが、食物を求めて人里へ下りてくるようになったのが始まりだと思えます。

針葉樹人工林は、林業採算性の悪化などを背景に間伐などの手入れが行き届かず、荒廃した人工林が増加しつつあります。現在その面積は、日本の森林面積の41%を占めているといわれています。

荒廃した針葉樹林は、餌もなく野生動物が棲める環境ではありません。また、集落周辺の里山も、農村の近代化で、利用されなくなり、放置され森林環境の悪化を招いています。

猿害の背景には、このような人為的な要因が多々あります。昨今、中山間地域では、里山の重要性が見直され、再生の機運が高まりつつあります。森林を健全な状態で管理することこそが、獣害対策です。

端に小さくなると、群れの縄張りを他の群れから守れなくなり最後には、コドモがほとんど産まれなくなつて消滅に至るようです。消滅を回避しつつ被害を減らすためには、地域と行政が一体となつて、捕獲だけに頼らない総合的な対策を進めることが必要です。

恒久的に被害をなくすには、サルにどのような環境を作ってやるかという、環境整備と防除が重要になります。山の餌だけを食べているサルの個体増加率は、1年に僅か1%です。これがサル本来の姿です。農作物に依存しているサルの増加率は10%以上と高く、農作物被害はサルの個体数増加の助長につながっているのです。

農林業のシカ被害

シカの急増による、農林業被害が深刻化しています。田植後、活着期から葉の伸長硬化がすすむまでが、シカの食害を受けやすい時期。

水田の周辺は、シカが最も好む場所です。水田を「エサ場」と認識して、一年中恒常的に出没しています。

シカは、田畑など開放的な場所に出没するのは夜の方が多いですが、山際の畑では日中に目撃することも多く、電気柵での防除は、24時間体制で稼働させる必要があります。収穫がおわるまで、昼も夜も…。

水稲の活着期～硬化の防除は深水管理が効果的といわれています。シカは、水中に口を入れて採食することを嫌う性質がありますので、田植後から中干しまでの期間、水深を深く保つことで、新たな費用をかけずに被害を軽減することができるといわれています。深水

管理と簡易防護柵を組み合わせることで、より大きな効果が望めます。シカの生息数が多く農地に頻りに現れる地域では、成熟期まで茎葉や穂の食害のほかに侵入による踏み倒し被害が続くことがあります。簡易防護柵設置はシカ防除には不可欠です。

近頃、山裾に金網を巡らす広域防護が目立ちますが、道路や地形の関係上、完全な閉鎖ができず、防護柵としての完全な機能が働いていないのか疑わしいところもあります。今後は、圃場周辺を直接囲む、防護柵設置に集落全体で取り組むことが必要だと思えます。

増えすぎたシカは、田畑のみならず、森林の植物をも食べ尽くしています。

自分の背の届く高さ以下の植物は全て食べ尽くし、それでも空腹が満たされないと、落ち葉すら食べてしまいます。今、山では裸地化が進んでいて、地肌がむき出しの森林が多く、土壌の流出などにより森林が持つ、公益的機能全般に悪影響を与える恐れがあります。

裸地化した森林の再生は非常に困難といわれています。また、樹木の樹皮を剥ぎ取って食べたり、雄シカが角をこすりつけるために、樹木にまで被害が及び、

立ち枯れの樹林が拡大し、いま、山は悲惨な状態になっています。今後、人間と野生鳥獣が適切な関係を継続するためには、絶滅の恐れのある鳥獣は積極的に保護し、逆に、自然環境や人間生活に被害をもたらすほど増加した鳥獣は、その要因を追求しながら、個体数調整などの対策が必要です。尚、個体数調整は、動物保護にもつながるといふことを、心におとどめ下さい。

立ち枯れの樹林が拡大し、いま、山は悲惨な状態になっています。今後、人間と野生鳥獣が適切な関係を継続するためには、絶滅の恐れのある鳥獣は積極的に保護し、逆に、自然環境や人間生活に被害をもたらすほど増加した鳥獣は、その要因を追求しながら、個体数調整などの対策が必要です。尚、個体数調整は、動物保護にもつながるといふことを、心におとどめ下さい。



美味いな～ タマネギ
矢川春日神社で
平成28年4月22日



矢川春日神社 名張B群目撃！ 大量捕獲後はじめて

【写真撮影・提供
吉岡正人さん】

4月22日、名張B群オトナ5頭（性別不明）と、頭数は確認できなかったが、数頭のアカンボを、矢川の吉岡正人さんが目撃。撮影。大量捕獲後、B群の矢川への出没は、はじめてのことです。

B群の矢川周辺への出没は、ここ4年間ほどは途絶えていたのですが、突然の出没に驚いています。画像では、受信機装着個体はいないようですが、同日、矢川周辺をパトロールしたところ、矢川区全域で強度の受信がありました。5頭の群れ以外に、受信機装着個体の混ざった群れがいるのか？、受信機装着個体がハナレになつているのでは？。遊動ルートを突然変えたのは、何故か？、今後、注目したいところです。協議会による報告で

は、捕獲後のB群の生息数（推定）は、ハナレ3頭を含むオトナメス 1頭
コドモ 1頭
アカンボ 5頭
となっております。

数的には納得できませんが、satudokomoの情報を見せると、森の奥に消えて行ったということとです。

ガラ空きになったB群のテリトリーはどうなるのでしょうか？サル達には県境がなく全国各地続きます。

大方の見方としては、「暫くは、この状態で推移すると思われるが、恐らく、どこかの群が進出してくることは間違いないであろう…」とみられています。

認定鳥獣捕獲等事業者制度

認定鳥獣捕獲等事業者制度とは、鳥獣の捕獲等に係る安全管理体制や、従事者が適正かつ効率的に鳥獣の捕獲等をするために必要な技能及び知識を有する鳥獣捕獲等事業を実施する法人について、都道府県知事が認定をする制度です。

狩猟文化の崩壊

かつて日本の、山里では獣肉は「山からの贈りもの」としてごく当たり前に食べ、日本独特の狩猟文化がはぐくまれていて、生態系の保全が保たれていました。だが、昔に比べて近頃は、狩猟をする人は大幅に減ってしまいました。

野生動物にとつての天敵はオオカミだったのですが、それも明治時代に絶滅してから天敵と言えるのは人間（猟師）だけになっていきますが、狩猟人口も年々減少しています。有害駆除は、今までは地域の猟友会が担っていました。近年では高齢化などでやりたくてもできないというのが現状だと思えます。有害駆除の場合は、市や町から幾ばくかのお金を貰えますが、経費と比べると損の方がはるかに多いと猟師さんは嘆いています。狩猟者に負担をかける、「害獣駆除活動なんてやってられるか!」

と...?。地域個体群の絶滅ということも想像に難くありません。朱鷺の絶滅を思い起こして下さい。その要因は狩猟による乱獲といわれています。この制度には、環境省がいう、「健全な生態系の保持」とは、結びつかない制度になると危惧性を、はらんでい

矛盾を感じませんか? アライグマは駆除 ハクビシンは保護

外来種・在来種とは。人の介在によって、本来の生息地域から、本来生息していなかった地域に入り込んだ生物種のこと。ただし、人の介在がなく入り込んだ生物については外来種として扱っていません。在来種は、元々その地域に自然分布していた生物を指します。最近、アライグマ、ハクビシンの被害が多発していますが、アライグマが駆除対象でハクビシンが保護対象で駆除対象外。平成17年の6月に外来生物法という法律が施行され、ハクビシンは特定外来生物に指定されているからです。理由は、明治以降で、いつ持ち込んだのか判

～おことわり～
ホームページやまだのかかしが、サーバーのサイバーテロでダウン。平成28年4月29日頃からアクセス不能になり、皆様には大変ご不便をおかけしていましたが、去る、5月5日に復旧いたしました。だが、過去のデータが、1年分程が消えてしまいました。至急、データの復旧に努力をいたしますが、暫時の余裕を頂きたいと思ひます。

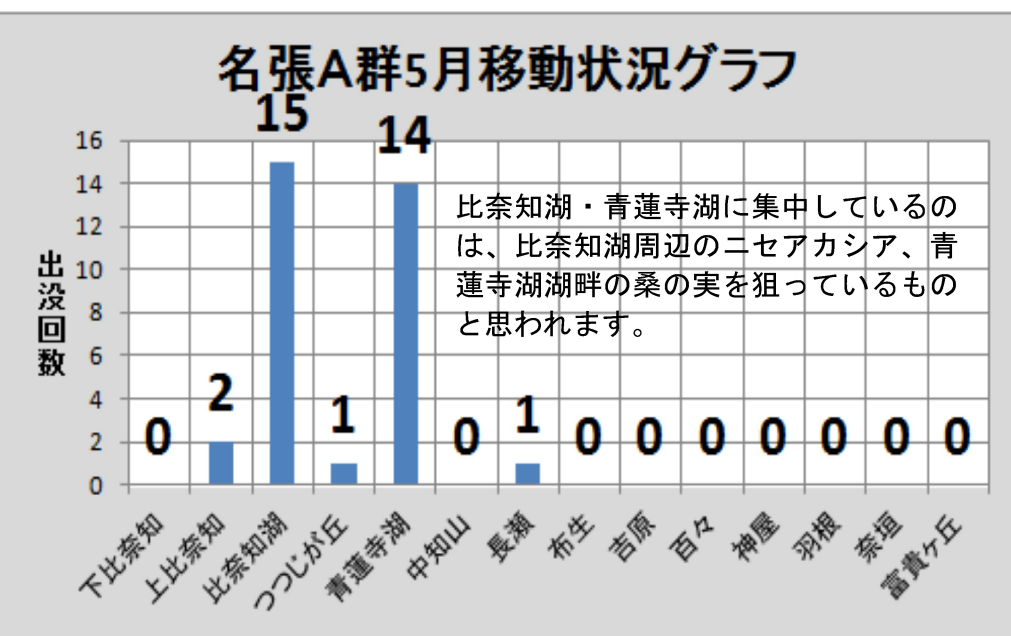
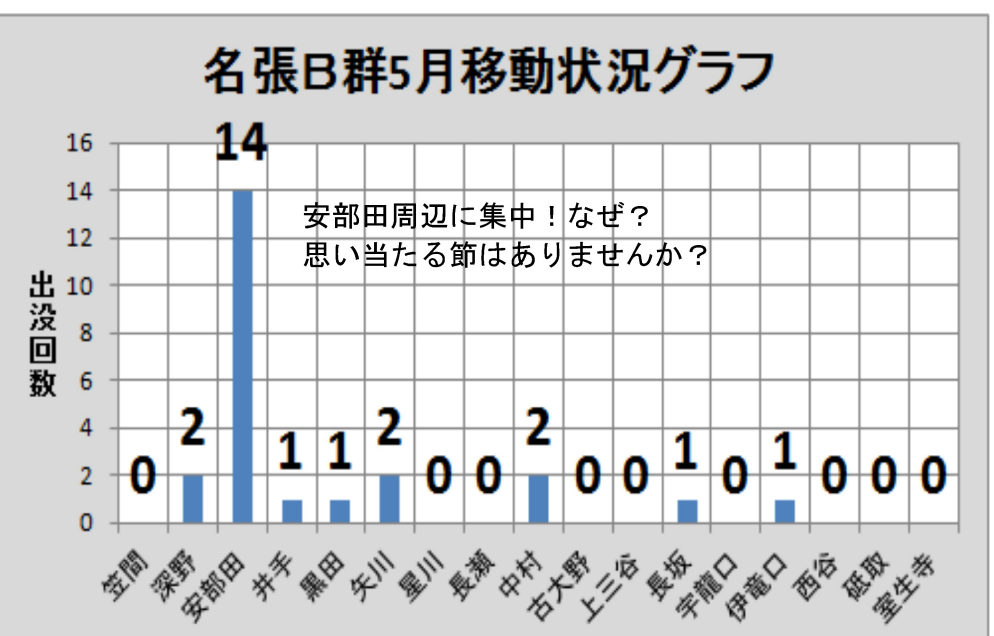
るものを対象にするという、いたって「あやふや」な国の基本方針にそってハクビシンは、はざされていきます。現在、ハクビシンが日本国内で私たちの生活に様々な問題を引き起こしていること考えるとき、この法律には大きな矛盾を感じます。同じようなことがイタチにもいえます。イタチは雑食性で何でも食べます。被害は、農作物や養魚池・家禽・など多岐にわたります。近頃は、家屋侵入などの被害が多発しています。鳥獣保護法（鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律）により保護されていますが、オスイタチは有害駆除は可能。メスイタチは狩猟対象ではないため、期

新・獣害対策指導員の紹介
紹介が遅れましたが、平成28年4月1日付けで、榊原 修さんが名張市獣害対策指導員として就任されています。地域の土地柄や地理に、不案内であろうと思ひますので、皆さんの暖かいご支援とご協力を、お願い申し上げます。各地域では、指導員さんには大きな期待を寄せています。獣害対策指導員さん

捕獲後の対策
全頭捕獲は難しく、今回のB群全頭捕獲においても、ハナレ3頭を含む7頭ほどを捕獲できませんでした。今後、小集団によるゲリラ的な被害が増えることも予想されます。全頭駆除すれば、被害がなくなると思いますが、多いと思ひます。だが、サルはそれぞれ群れごとに行動圏をもって遊動しているの

からの情報は、毎日のようにEメールで入りますが、「〇〇地区で強受信」「△△集落で弱受信」などで、目撃情報がメッキリ減少しています。地域の人は、一日一回くらいの目撃情報を期待をしています。加えて、地域住民の

サルの出没状況 名張A・B群
5月に入り両群とも特定の地区に集中するようになります。A群では、青蓮寺湖周辺と比奈知湖周辺に集中しています。これは青蓮寺湖には桑の実、比奈知湖にはニセアカシアの花が真っ盛りで、それを狙って集まってくるのです。B群は、何故か安部田周辺に集中しています。両群とも一局に集中しているの、農作物の被害情報は少なくなっています。大量捕獲後まだ間がありませんが、今のところよい方向で、経過しているように見受けられます。





捕獲後の対策

宇陀・名張市では、名張A・B群の大量捕獲を実施しました。

名張A群

平成28年2月19日～同5月10日捕獲終了。捕獲数27頭。詳細は次号。

名張B群

平成28年1月9日～同3月末捕獲終了。捕獲数32頭+有害駆除5頭計37頭。B群の生息数（推定）は、ハナレ3頭を含む、オトナメス1頭、コドモ1頭、アカンボ5頭となっています。

群れの個体が極度に減少すると、遊動域を他の群れから守れないかも？。動向に要注意。

今後、小集団によるゲリラ的な被害が増えることも予想されます。

B群の発信器装着個体は、捕獲後放獣したようですが、群れに合

流しているのでしょうか？。

大量捕獲イコール猿害解決ではありません。その成否は、捕獲後の対策で決まります。

今までの対策は、サルから農作物を直接防護する方法でしたが、これからはサルを山に追い上げ、人里にこないような環境に整え、棲み分けを図って行くことが最善の方法だと考えます。

猿害は、人間に対する一方的な加害ではなく、その背景に人為的な自然破壊が前提にあるということ踏まえ、対策を考える必要があります。まず、原点に戻り集落・圃場周辺の環境を、サルの嫌がる環境に改善。加えて、サル（野生鳥獣）の目線を見た、森林整備・里山再生を早急に図ることこそが、大量捕獲後の最善の手立てだと考えます。



シカが増えた！ キツネが減った！

最近シカが増えたが、キツネが減ったナ...という話をよく耳にします。そういえばキツネの鳴き声を聞かなくなつて久しいです。

キツネが減る要因と、シカが増える要因は、直接のかわりはないと思いますが、どこかでリンクしているのかも知れません。

1998年3月、根室半島のキツネから初めて疥癬の個体が発見され、疥癬の蔓延が直接の要因だと分かってきました。

江戸時代、日本では、シシ垣に象徴されるように、人間は野生動物の生息環境を尊重して、棲み分けを図り、大型の野生動物が人のそばで暮らすという、世界でも比類のない国だったのです。

そんな日本で近年、シカが増えすぎ農業・林業に深刻な問題を起こしています。

シカによる被害は、森林被害全体の約8割を占め、林家の林業経営意欲を低下せるとともに、食害によってシカの口の届く高さの枝葉や下層植生がほとんどなくなり、土壌流

疥癬とは、ヒゼンダニという小さなダニが、動物の皮下にトンネルを作つて繁殖することで引き起こされる皮膚病です。重症化すると体や尾の毛が抜け、皮膚が厚く硬くなり、ひび割れます。激しい痒みがあるため、キツネは患部をかきむしり、その傷口から細菌感染も起こります。顔面に寄生した例では、目の周りの皮膚が硬くなり、ほとんど目が開かなくなった個体もありました。こうなると餌も捕れなくなり、キツネは痩せ衰えてやがて死んでしまします。この病気は、感染している個体と体を接触させることや、同じ場所を寝床に使うことなどによって感染します。親子の中に1頭でも疥癬の個体がいれば、すぐに家族全員に感染してしまふでしょう。また、分散行動や交尾期の移動によって流行地域も拡がると考えられます。

浦口宏二（うらぐちこうじ）
神奈川県川崎市出身。1988年北海道大学大学院農学研究所修士課程修了。同年北海道立衛生研究所衛生動物科勤務。

出等により森林が持つ公益的機能にも影響を与え、農業被害の比ではなく深刻な状況です。シカの増加が問題になり始めたのは、20年ほどまえのことです。そもそもの原因は、戦後の拡大造林政策や畜産振興のための草地造成など、人間の活動が大きく影響を及ぼしています。

いま、シカは人間の敵のように取り上げられていますが、昔は林床のササを食べることで、種子の芽吹きを助けて森林更新を促す、健全な生態系の維持には欠かせない重要な存在でした。しかし、現在では増えすぎたことやその生息域の拡大によって、農林業被害にとどまらず、森林の植生破壊や土壌の流出をも引き起しています。だが、棲み分けが適正に保たれていた時代には、このような問題には、少なかつたのです。シカも森のいち住人であり、生態系の重要な構成員だったのです。



【写真右リディアラインが広がる森林。名張市赤目町龍神山にて撮影・山村準】

先ず敵を知ろう【サル編】

生態・特徴・対処

ニホンザル（以下サルと表記）

はかづつ「群れ」と呼ばれるメス中心の血縁集団で生活をして

ます。メスは生涯生

れた群れを出ることは

なく、母と娘の親子関係は集団

中で一生続きます。

この血縁集団が集ま

たものが群れ。

群れは、おもにメスとその子供を中心に構成され、野生の群れにはボスは存在しません。メス同士が非常に高度な序列社会を作っているというところが分かってきます。その序列を乱すようなこと、つまり捕獲が分裂の引き金になるといふことがわかってきます。ただ、どの個体が高順位かメスなのか識別できないので、オトナメスの捕獲をやめようというの一般的な考え方。オトナオスは群れの中心に1割程度の数しかいないといわれます。オスは大人になる前（4から6歳ごろ）に群れを離れて単独で行動したり、オスだけのグループを形成したり、他の群れに加わるなどして生涯を過ごします。特に、群れを離れ単独で行動するものをハナレザルなどと呼びます。オスがどんなきつかけで群れを出るかは分かっていませんが、結果的に近親相姦を避けられています。

群れの規模は10数頭から100頭超までさまざまですが、その規模は群れの分裂や生息域の環境などにも左右され、おもに40から50頭前後の群れが多いといわれています。サルの交尾期は10月から翌1月ごろで、おもに170から180日の妊娠期間を経て、4月から7月ごろが出産期で、1頭を出産します。栄養価の高い農作物に依存している個体では、まれに双子が生まれることがあるといわれています。初産は7から9歳で、20歳頃までほぼ隔年で出産します。しかし、栄養状態の良いサルでは初産時期が早く、毎年出産するものも少なくないそうです。サルの活動はおもに日中で、その活動の多くは食べることに費やされ、夜は眠ります。カキやナシなど果実が大好物ですが、植物質を中心に、コケやキノコ、昆虫やカニやカエルの卵なども食べる「雑食性」です。エサを求めて遊動域を巡回していますが、遊動域を均等に利用するのではなくその時期の主要な食物の分布にあわせて変化します。一日の遊動距離は1〜3kmが普通です。遊動域内に針葉樹林が多いと餌場としての価値が低いため、必然的に遊動域は広くなります。そんな群れがいつたん農作物の味を覚えてしまつと、何度でも畑や人里に出てくるようになります。

サルの被害防除が他の獣類の場合と大きく異なる点に、優れた四肢を持つ点が挙げられます。人と同様に物をつかむことのできる両手に加えて、足でも物をつかむことができ、「優れた四肢」が、被害対策を複雑にしている大きな要因ともいえます。

農業への被害は複雑で、いったん農作物の味を覚えてしまつと、被害が繰り返されたり、人馴れをする原因となつていきます。野生での食は栄養価が低いので、必然的に農作物を狙うのです。サルは人間と同じ視覚動物で、食べものなどは目で見て判断をします。運動神経（特に四肢）が発達しているので防除はひじょうに困難です。

サル被害の特定については、日中の目撃によるものが主ですが、そうなる前に、追い払ってしまひましょう。け落ちた体毛や糞などの「フィールドサイン」のほか、カブやタマネギなどのように引き抜いてかじつた食痕や、クリやカキなどをかじつた歯形などからもサル被害を特定することができます。

ここ10年ほど前は、身近な山にサルはいましたが、人里にまでは侵入してきませんでした。サルが住宅街、あるいは集落・田畑にまで出現したということは、サルの生息空間である広葉樹林が減り森林での菜食が出来なくなつたなど様々な原因があると思いますが、原因の言及ははしません。ただ、サル達は常に空腹であることは事実です。サル被害というと、一般的には農作物被害を想像しますが、市街地では、屋根から屋根を10数匹のサルの集団が移動し、屋根瓦など生活環境被害が増えています。また、玄関に飾っている花木にまで手を出し、とにかく食べられるものを見つけ次第、口にしていくというのが現状です。